

## フランス政治学の発展 ―途上にあるディシプリンなのか

ジャック・カブドヴィエル (Jacques Capdevielle)

吉田 徹 (訳)

**解題：**

本稿は、戦後を中心としたフランス政治学発展の歴史の解説である。筆者のカブドヴィエル (Jacques Capdevielle) 氏は、現在パリ政治学院 (シアンスポ) の付置研究所である CEVIPOF (フランス政治生活研究センター、現在では政治研究センターへと改称) の主任教授 (Directeur de Recherche) の職にあり、労働運動の政治分析ならびにオルター・グローバリゼーション運動についての研究者として名が知られている。

カブドヴィエル氏は、本学法学研究科のグローバル COE プログラム『多元分散型統御を目指す新世代法政策学』の枠内で開催された国際ワークショップ「日欧戦後政治学の比較発展史」(2009年2月24日)での基調報告のため来日され、フランスならびにヨーロッパ、そして日本における戦後の政治学の発展についてのディスカッションに参加された。本稿は、こうした経緯を踏まえて、氏が改めて書き下ろした原稿を訳出したものである。

戦後フランスの政治学の発展は、やはり「シアンスポ (Sciences-Po)」の名称で通る「国立政治学財団 (Fondation nationale des sciences politiques)」と「パリ政治学院 (Institut d'Etudes Politique de Paris)」の存在を抜きにしては語れない。本稿でも触れられている通り、同財団と学院は、普仏戦争で敗れたフランスで私立のエリート養成高等教育機関を前身とし、第二次世界大戦後には公的教育部門に組み入れられつつも、高い自律性を持った、今日フランスで最もダイナミックな高等教育研究機関のひとつとなっている。フランスの社会科学研究部門の頂点に位置する組織のひとつであり、名の知られた政治学者・社会科学者の多くが同学院に所属し、活発な教育、研究活動を展開している。狭義の政治学ではなく、その他の社会科学領域と連携する姿勢は「政治学 (Sciences Politiques)」を複数形で表記している点からも伺われる。

カブドヴィエル氏の論考は、こうしたユニークな政治学研究機関と戦後フランス政治学的发展がどのように交差し、そして何を意識してこうした研究が发展してきたのかを、日本の政治学者にとっても馴染み深いデュヴェルジェやデュロゼール、グロッセルといった人物名を交えながら考察したものである。政治学者らしく、時代背景の中での制度的發展とアクターの行動に目を配りつつ、大きな流れをつかむバランスのとれた論考だが、それは1941年に生まれ、60年代半ばに研究者としてのキャリアをスタートさせた氏のライフストーリーを振り返るものともなっている。本稿がまた知識社会学的な趣を持っていることの原因のひとつだろう。

最後に、上記ワークショップでやはり報告者を務めていただいた CEVIPOF のオリヴィエ・ローゼンベルグ (Olivier Rozenberg) 氏、また討論者を務めていただいた網谷龍介氏 (明治学院大学国際学部) および福元健太郎氏 (学習院大学法学部) に記して感謝したい。

(吉田 徹 記)

フランスの政治学誕生の時期を特定することは簡単ではないが、その手掛かりは1871年に求めることができるだろう。なぜならこの時こそ、テーヌ (Hippolyte Taine)、ルナン (Ernest Renan)、ソレル (Albert Sorel)、ルロワ=ボーリユー (Paul Leroy-Beaulieu) といった学者や実業家によって「政治学自由学校 (Ecole Libre des Sciences Politiques)」が創設された時代に当たるからだ。この「政治学自由学校」は、公法学者・歴史家で学際的な教授法を主張したエミール・ブートミー (Emile Boutmy) のもとで運営されることになる。

設立された当初の目的は、プロイセンに敗北し、パリ・コミュンといった内戦を経て、汎ヨーロッパ的な社会主義運動の盛り上がりの中で、フランスの新たなエリートを作り上げることにあった。ヨーロッパにおける政治学を論じたジャン=ルイ・ケルモンヌ (Jean-Louis Quermonne) が指摘したように、英国のロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、イタリアのフィレンツェ大学政治学部、ギリシャのパンテイオン大学の創設を始めとして、こうした動きはヨーロッパに共通したものだ<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> *Synthesis Report for The Conference for the Evaluation of Political Science in Europe*,

フランスにおける「政治学自由学校」の精神が、今日のパリ政治学院にどう受け継がれたかは、国立政治学財団 (Fondation Nationale des Sciences Politiques) の会長だったルネ・レモン (René Rémond) の2006年6月の同財団60周年記念公演で触れられている<sup>2</sup>。彼は、「厳密にいつてシアンスポは、創設されたというより、再生された組織である。その再生こそを我々は今日祝っている。新たな財団は、新たな過去から受け継がれてきた物語の中のひとつの新たな章だということができるだろう。シアンスポは1872年、つまり、前身の政治学自由学校の創設の時に始まった」<sup>3</sup>。

個人的には、必ずしもこの見解には与組できない。なぜなら、前世紀に存在したのは政治学というよりは、法律や経済、歴史と道徳的関心に関する理論的な随筆のみであり、哲学的省察すらも、ドイツの大学システムと比較してみればなおさらのこと、極めて周辺的な地位に追いやられていたためである。

従って、もうひとつの時期、すなわち1913年こそがフランス政治学誕生の年だというべきだろう。それは、これがアンドレ・ジークフリード (André Siegfried) の「第三共和政期のフランス西部の政治的地図 (Tableau politique de la France de l'Ouest sous la Troisième République)」公刊の年に当たるからだ。ル・アーブル市長で国会議員を務めていたジュール・ジークフリード (Jules Siegfried) の息子であった彼は、当初政治家を志したが、地元ル・アーブルでの選挙に三度敗れた。当時のブリタニー地方とその周辺地域の投票行動を、経済、社会、地理的なアプローチによって分析したこの本も、当初は限られた読者しか得られなかったが、戦後、とりわけ50-60年代に入って政治学を学ぶ者にとっての必読書となった。個人的な経験を言えば、法律を学んだ後にシアンスポで政治学を修める際、この本を毎週のように課題として指示されたものである。ジークフリードによるこの本は、いわば共同体の一員として認められるために暗記しなければならない經典の

held in Paris on April the 19<sup>th</sup> and 20<sup>th</sup> 1996.

<sup>2</sup> Presentation to introduce the «festival of knowledge» celebrating the Sixtieth Anniversary of the Refoundation of Sciences Po, in June 2006.

<sup>3</sup> [通常、パリ政治学院とその運営組織体である国立政治学財団の双方を合わせて「シアンスポ (Sciences-Po)」と呼ばれる一訳者註]

ようなものだったのである。

こうした個人的経験を記すのも、それは1960年代から現在に至る、フランス政治学における選挙分析の重要性を物語っているからである。この選挙分析の一歩少なくとも当時における一圧倒的な優位性は、国立政治学財団の最初の叢書である「カイエ (*Cahiers de la Fondation Nationale des Sciences Politiques*)」の第一巻が『選挙社会学の研究 (*Etudes de sociologie électorale*)』と題されていたことから、理解できるだろう。

フランスのこうした事情は別としても、多くのヨーロッパ諸国でも政治学は50年代初頭から自律的な学問領域として生成していくこととなり、大学のカリキュラムに取り入れられていく時代を迎える。他方、フランスでの政治学の誕生は、その制度的過程と異なる学問領域を母体として強いパーソナリティを持ち、政治社会的な改革に身を投じた学者たちのコミットメントに負うところが大きいのである。

### 独特の制度的発展をみせた戦後政治学

1945年11月9日、首相ミシェル・ドブレ (Michel Debré) の提案のもと、ドゴール (Charle de Gaulle) 将軍によって署名されたオルドナンス (政令) によって、それまでの自由学校が2つの異なる組織へと改編されることになる。こうして誕生したのが、国立政治学財団 (FNNSP) とパリ政治学院 (IEP) である。

1950年以降、2つの組織の長は政治任命によって、FNNSP では「アドミニストラトゥール (*administrateur*)」、パリ政治学院では「ディレクトゥール (*directeur de l'IEP*)」として同人物が兼任することになったが、それまで政治学研究の支援を任務とした FNNSP の総長を務めていたのは他でもない、アンドレ・ジークフリートその人であった。

こうした官民のセクターが混合した独特の制度的特徴は、自由学校の遺産をナショナルなものへと格上げすると同時に、他方では他の高等教育機関と比べ、特に資金面での柔軟な組織運営を可能にするものとなった。例えば、1945年の時点でシヤンスポは約7万冊の蔵書と340のジャーナル・新聞紙を自由学校から受け継ぎ、さらに1952年には FNNSP が「国際関係研究センター (*Centre d'Etudes et de Recherches Internationales*、通称

*CERI*)」を、ロックフェラー財団とフォード財団の支援を受けて設立している。近年でも、パリ政治学院は他の国立大学とは異なり、高額な授業料を徴収することを許されているが、これも教育の質と独立性を確保するための特別な措置となっている。

パリ以外の政治学院は、1945年にストラスブール、1948年にグルノーブル、リヨン、ツールーズ、1956年にエクス・アン・プロヴァンス、そして1991年にはリールとレンヌで設立されている。これら研究教育機関は FNNSP とパリ政治学院との緊密な協力関係にあり、そのネットワークは、1950年代から政治学研究を取り入れ始めた他の高等教育機関との競争で優位に働いている。

実際、デュヴェルジェ (Maurice Duverger) やヴェデル (Georges Vedel) といった公法学者や憲法学者の尽力もあって、1954年から政治学は法学部での必修科目となっている。もっとも、大学における自律的な政治学の学部は1971年のパリ第1大学 (パンテオン=ソルボンヌ) のみに留まった。それでも徐々に制度的環境は整えられ、1972年には政治学講座の担当教授資格試験 (*l'agrégation de science politique*) を二年ごとに実施することが取り決められ、1983年には政治学でのアカデミック・ポストの全国的な配分を決定する代表者委員会も文部科学省に設置されるようになった。

ここで、FNNSP と大学以外での政治学の発展にも触れておきたい。それが1945年に改組発展した「国立科学研究センター (*Centre National de la Recherche Scientifique - CNRS*)」である。CNRS の目的は文理双方の科学の振興と独自の研究員の確保である。政治学者は、当初、法律部門に属していたが、1982年に政治学部門が独立し、現在では労働・組織社会学部門のもとに統合されている。

もっとも、その間の FNNSP の発展には目覚しいものがあつた。1948-49年に国際政治学会 (IPSA) の設立と同時にフランス政治学会 (AFSP) が立ち上げられ、事務局は FNNSP に据えられることになった。1951年には、ジャン・メノー (Jean Meynaud) が編集長を務める「フランス政治学会年報 (*Revue Française de Science Politique - RFSP*)」の公刊が始まる。同時に、組織的な拡張もみられることになり、先に紹介した CERI (1952年) がメノーのほかメリア (Jean Meyriat) やデュロゼール (Jean-Baptiste Duroselle) によって、さらには同年には経済研究センターが、そして1960年にはトゥ

ッシャール (Jean Touchard) とゴゲル (François Goguel) によって「現代フランス政治生活研究センター (Centre d'étude de la vie politique française contemporaine - CEVIPOF)」が発足することになるのである<sup>4</sup>。中でもゴゲルは1956年の段階で、すなわち政治学教授資格が導入される16年も前の段階で、政治学の博士過程の創設に尽力したことで知られている。この教育課程は、後にグロッセル (Alfred Grosser) とルネ・レモン (René Rémond) によって担当されることになる。

こうして現在では、政治学者はシアンスポやその他の地域の政治学院もしくは大学の法学部を所属先として選択することになる。政治学院は、学生の受け入れについては選択的であり、パリを頂点として受験競争が激しい。反対に大学法学部において入学試験は原則として存在しないが、政治学は依然として法学者がしばしば教授しており、また二次的な学問としかみなされていない。先に紹介した、1971年にパリ第1大学政治学部が創設に到ったのも、政治学が高等教育における有意な学問であり、法学と同様に専任教員を確保することが必要だと認められるまでの、長い格闘の結果だった。

こうした政治学の普及には、パリ政治学院とFNSPによる後押しが必要だったが、その生成期において、2人の卓越した政治学者の役割を無視することはできない。それが、ジャン・メノーとジャン・トゥッシャールである。

### 「大変な」政治学者：ジャン・メノー (1914-1972年)

メノーは、カルペントラという、フランスの典型的な田舎町で1914年に生を受けた。彼はギリシャ出身の富豪と結婚して経済的な独立があったこともあり、政治学自由学校の保守派やエリート主義者に対する最も辛らつな批判者として立ち振る舞った。実際、法学を学んだ彼の博士論文は報道の自由についてであり、その後数学と金融についての学部教育を受け、ソ

<sup>4</sup> ゴゲルは、シアンスポの運営委員会の事務総長でもあった。See, Pierre Benoist, François Goguel, Haut fonctionnaire et politiste, *Les Cahiers du Cevipof*, 50, Janvier 2009.

シエテ・ジェネラル銀行に奉職して実体経済を学ぶ。その後1947年初めから1954年5月までの間、FNSPの事務総長を務めたが、他方では48年から49年までデュヴェルジェとともにIPSA創設に尽力し、冷戦下で影響力を増していたアメリカ政治学会に対抗するために、同学会の事務総長も務めることになる。

1951年に彼は「フランス政治学会年報」を創刊、自ら編集長を務めることになるが、それ以前にも、「文書分析報 (*Bulletin analytique de documentation*)」の責任者であり、前年には高等師範学校卒業者でもあったメリアを所長とする図書センターの創設にも関わった。シアンスポは、こうしてヨーロッパでも有数の図書・文書館となり、1952年の時点でシアンスポとFNSPはすでに1000誌以上もの専門定期刊行物を所蔵することになったのである。

メノー自身も75冊の著作と250本以上の学術論文を著し、その範囲は人類学、社会学、心理学にまで及んだ。彼はまた、雑誌「政治学国際書誌学 (*International Bibliography of political science*)」の主幹を務めた人物でもあった。

1987年から1996年までシアンスポ学長およびフランス政治学会理事長を務めたアラン・ランスロ (Alain Lancelot) は、このメノーのアシスタントからキャリアをスタートさせた人物である。デコワン (Richard Descoings) は、ランスロのメノー評を次のように書き留めている<sup>5</sup>。「彼は大変に恵まれ、大変な仕事をし、結婚を通じた大変な富を手にし、大変に魅力的な人間だった。つまり『大変 (*extrêmes*) な』人間だったということになる (略) 私は当時二十歳に過ぎなかったが、私は私にとってのギャッツビーに遭遇したのだった<sup>6</sup>。

もともと、メノーのような人間にとってシャプサル (Jacques Chapsal)

<sup>5</sup> [デクワンは、1989年から1991年までシアンスポの副学長、次いで96年から現在まで学長を務めている行政官一記者註]

<sup>6</sup> Richard Descoings, *Sciences Po. De La Courneuve à Shangai*, Les Presses de Sciences Po, p. 71 [ギャッツビーとは、米作家フィッツジェラルドの小説『グレート・ギャッツビー』の登場人物であり、ここでランスロは作品の主人公ニック・キャラウェイに倣った目線でメノーを描写している一記者註]

のように献身的で協調的な人間と働くことは容易ではなかった<sup>7</sup>。メノーは1954年にシアンスポを離れジュネーヴとローザンヌで暮らし、1965年から生涯を閉じるまで、モンリオール大学で教鞭をとった。

### 矛盾した存在：ジャン・トゥッシャル (1918-1971年)

ランスロの言葉に再び耳を傾けてみよう。「もちろん、サンギョーム通りでは、特にもっと普通の隣人を求めたシャブサルのような人物にとって、メノーは型破りな人物に過ぎた。そこで新たに見出したのがトゥッシャル (Jean Touchard) だった」<sup>8</sup>。

メノーはいかなれば「独立独行 (self-made) の社会学者」だった。これとは反対にトゥッシャルは、高等師範学校卒で文学の教授資格を持つ伝統的な学者だった。もともと学界に慣れ親しんでおり、あるいはだからこそ、シアンスポにおいて学界を刷新する手段として、何を追求したらよいかを知り尽くしていた人物だった。

彼は戦後、ドゴール政権下でポンピドゥー (Georges Pompidou)<sup>9</sup>とともに働き、1946年にはアルゼンチンにフランス語教師としても派遣されている。帰国後、彼は外務省で、海外におけるフランス語教育の普及の任務に就く。彼がメノーの後任として、シャブサルから助教職でシアンスポにリクルートされたのは翌年のことで、その後1954年にFNSPの事務局長になり、1971年の没年まで同職に留まった。

トゥッシャルは、メノーほどではないにしても、自己主張の強い、カリスマを持った人物でもあった。FNSPの運営責任者として、メノーが残した仕事を引き継ぎ、CERIの発展、そしてゴゲルとともにCEVIPOF設置に尽力した。また、FNSPの資料管理機能を拡充させ、自前の出版社をボダン (Louis Bodin) とともに設立、さらに1967年にはCNRSと交渉の末、

<sup>7</sup> [シャブサルは、戦後シアンスポの創設に貢献し、1947年から79年までシアンスポ学長を務めた政治学者—訳者註]

<sup>8</sup> Richard Descoings, op. cit., p. 71-76 [サンギョーム通りは、パリ6区にあるパリ政治学院本部の場所—訳者註]

<sup>9</sup> [首相官房長、後に大統領(1969～1974年)—訳者註]

CERIおよびCEVIPOFとの正式な協定を結ぶことになる。また、自らのキャリア経験を活かして、政治研究の博士課程をデュロゼール、ルネ・レモン、グロッセル、デュヴェルジェとともに設置した。

トゥッシャルは、魅惑的かつ矛盾に満ちた人物でもあった。それは、文学の豊穡さに言及しなければ講義に値しないと考える最後の世代に属すると同時に、学際的なアプローチを強調していたところにも表れている。彼は、19世紀の小説家スタンダールの作品を題材にした政治分析を何時間もこなすことができただけでなく、政治行動を分析するための計量分析の必要性を、早くから唱えていた人物だったのである。

その彼も、1968年にはフランスの政治的地震に見舞われ、サンギョーム通りのシアンスポの建物の中で寝食することを余儀なくされることになる。

### 1968年：両義的な転換点

1968年と、続く2、3年間はシアンスポにとっての奇妙な時代、もっといって多くの意味において超現実的な時代だったといつてよいだろう。パリのほとんどの大学はストライキに突入したが、シアンスポはそれを免れたからである。遭遇したホームレスに率いられ、ソルボンヌからなだれ込んだ赤黒の旗をなびかせた学生たちがシアンスポを占拠したのは、5月14日の一日だけのことだった。

他の教育機関と同じように、あるいは他の教育機関以上に、多くの異なる党派を巻き込んだゆえに、シアンスポでの紛争は混乱した。まず、同時代のフランスと同じく、左派と右派、革新と保守との間に対立が存在した。トゥッシャルのようなリベラルな革新派にとって、これは認めがたいことであった。

次に、多くの部門にまたがった形で、若いアシスタントや研究者と常勤の教員や学長との間の対立があった。つまり、「大衆と学界エスタブリッシュメントとの闘い (*les masses contre les mandarins*)」である。

しかし、フランス政治学において重要なのは第三の対立だった。トゥッシャル、ルネ・レモンやグロッセルといったシアンスポでの学界エスタブリッシュメントはそれまで人文的教育を受けてきており、これが若い

アシスタントや研究者によって保守的なアプローチだと批判されたのである。社会学や経済学での対立と異なり、それはマルクス主義からの批判ではなかった。フランス政治学では、プーランツァス (Nicos Poulantzas) の著作を除けば、マルクス主義は大きな影響力を持たなかったからだ。反対に、批判の新たな基準を提供したのは、デヴィッド・イーストン (David Easton) やトルーマン (David Truman)、リブセット (Seymour Martin Lipset)、レーン (Robert Lane) やドイッチュ (Karl Deutsch) といった、アメリカの政治家者たちによる研究手法だった。彼らにとって、多かれ少なかれ、伝統的な歴史的アプローチに変わって、政治学の実証主義化こそが重要であったからである。

更なる世代間対立は、パソコンの普及から派生したものであった。筆者がキャリアをスタートさせた1965-66年には、シアンスポの地下室に巨大なソーターとパンチカードの機械がすでに備えられていた。数学と物理学で用いられていた大型計算機は、オルセーのキャンパスにあるのみで、シアンスポの研究者は、そこまで出向いて作業をする必要があった。しかし、70年代後半から80年代後半にかけて、これはパーソナル・コンピュータに置き換えられていくことになる。パソコンの普及によって、計量分析とデータ分析が進むとともに、もう一つの対立が生み出された。すなわち、「古代人」と「近代人」との対立である。ここでいう「近代人」たる若いアシスタントや研究者たちは、アメリカ政治学の概念や実証的な計量分析に慣れ親しみ、同時にまた、自らの左翼性を強調することになったのである。

この対立を象徴したのがジョルジュ・ラヴォー (Georges Lavau) かもしれない。彼は1948年に公法で初めて教授資格を得て採用された人物であり、グルノーブル大学の教員であった62年には、フランスで初めてホワイトカラーとブルーカラーがともに行動した「ネルピック・ストライキ」を指導した立場にあった。その彼も1968年に、シアンスポで今度は同僚とともに、学生参加についての協議をする立場へと転じたのだった。

1968年の事件は、シアンスポに複雑かつ両義的な結果をもたらしたというべきだろう。その影響は、学問の領域が何であるかを定めているシアンスポのヘゲモニーによってさらに複雑化している。これは少なくとも70年代になるまで、フランス政治学でなぜ批判理論の立場が受け入れられなかったかを説明する大きな要因でもある。特に、この時代に社会学と経済学

における批判理論が発展していったことを考えても、そう結論付けるのが妥当であるように思われる。この事実は、マスペロ出版のカタログが何よりも雄弁に物語っているのである<sup>10</sup>。

---

<sup>10</sup> [マスペロ出版 (Éditions Maspero) は1959年に設立された出版社で、ルイ・アルチュセールの『マルクスのために』『資本論を読む』(ともに1965年出版)の版元として知られている。バリバール、バディウ、ランシエールといった思想家のコレクションも手がけたが、1968年以降、体制転覆を扇動するとして多くの本の発禁処分を受け、また極右やマオイストからの攻撃を受け、82年に入って実質的に解散した一訳者註]